

福島県東京事務所 伊藤所長が、本県を応援くださる企業の方々と対談する企画は第3回目を迎えました。今回のゲストは、東京メトロ広報部長の堂免敬一さん。

これまでの復興支援の取り組みや今後の展望などを伺いました。



○写真右  
東京地下鉄株式会社  
広報部長兼秘書室長

どうめん  
堂免 敬一さん

○写真左  
福島県東京事務所長  
伊藤 直樹

## ■東京地下鉄株式会社のこれまでの取り組み

- 東京メトログループおよび社員一同から義援金の寄付。
- 被災地に非常用飲料水など救援物資の提供。
- 東京メトロの商業施設において募金箱を設置。
- 2011年5月、銀座駅で福島県、宮城県、岩手県、青森県、茨城県の物産展を開催したほか、お笑いネタライブ&オークションも併せて開催し、オークションの売上および募金を義援金として寄付。
- 被災3県のアンテナショップに物産の販売促進用に1日乗車券を無料提供。
- 東京メトロ広報誌「TOKYO METRO NEWS」に2013年5月号から毎月福島県情報を掲載。
- 東京メトロ三越前駅（銀座駅）における福島産直市の開催。
  - ・2012年から年2回実施。これまで14回の開催。
  - ・場所：東京メトロ三越前駅銀座線コンコース（2016年までは東京メトロ銀座駅日比谷線コンコース）。
- 東京メトロの社員食堂で福島県産米を使用。

**伊藤：** 福島県は、今年度から皆様からの復興支援という一方通行の形から、共に発信しながら、「共働」という言葉をキーワードに情報発信の取り組みを始めました。

これまで東京メトロさんには、震災直後に義援金や物資の提供を始め、広報誌の一枠に本県の情報の掲載、また、駅のコンコースを使用した産直市を定期的で開催していただいています。東京メトロさんの福島に対する復興支援のあり方をお聞かせください。

**堂免：** 震災直後、会社として何かできないかということを考え、東京メトログループや社員からの義援金をはじめ、備蓄用飲料水などの救援物資なども提供させていただきました。

震災から2か月程度経過した頃、改めて東京メトロとして何ができるかと考えたときに、

- ・震災当時は630万人/日、(昨年度は742万人/日)と多くのお客様に毎日東京メトロをご利用して頂いていること、
  - ・人々が集う駅や車両という多くの施設等があること、
  - ・これまで築き上げてきた他社とのコラボレーション実績があること、
- など、東京メトロにある3点の強みを生かしたいと考えました。

2011年5月にまず、ANAグループさんに協力いただき、東北4県と茨城県の応援マルシェを開催したほか、ワタナベエンターテイメントさんと連携してお笑いライブを行い、募金活動なども行いました。さらに、福島・宮城・岩手の各県アンテナショップに対し、1日乗車券を活用して販促キャンペーンなどをスタートさせました。

その後、継続的に何かできないかと考えていたときに、東京都が2012年5月から「ふくしま⇄東京キャンペーン」を開始したので、同キャンペーンに賛同する形で第1回福島産直市を9月に銀座駅で開催しました。これ以降、福島産直市については、毎年2回開催し、これまで計14回と回を重ねております。

また、2013年から「TOKYO METRO NEWS」に福島県の復興を応援するコーナーを設けて、毎月掲載しています。今年2月開催された東京都主催の「3. 11 東日本大震災風化防止イベント」もこのコーナーで情報発信させていただきました。



【TOKYO METRO NEWS を説明する堂免部長】

**伊藤：** 3つの強みということでお話がありましたが、具体的にお話していただけますか。

**堂免：** まず、多くのお客様に東京メトロをご利用して頂いているということです。つまり、お客様に対する情報発信力というものが当社の強みの一つであると考えます。東京という場で、現在の福島の状況や、福島への支援内容など、お客様に発信することで多くの皆さんに福島県の現状をご理解いただき、そのことが復興の支援になるのではないかと考えております。駅や車内が情報発信の場所になります。福島産直市を実施した際、多くのお客様が産直市を目的に駅に足を運んでいただけます。車内での中吊り広告やポスター掲示を見て来場されるお客様もいますし、たまたま、通りかかったお客様もいます。多くの方々に福島の名産品を実際に手にとってもらえるような場を提供できるという点も1つの強みです。



【(上) 駅貼り広告 (下) 中吊り広告】

**伊藤：** 利用者が多いこと、駅や車両などに多くの方々が集まること、他社とのネットワークがあること、このような東京メトロさんの社会的影響力、底力を最大限に生かして、福島県情報を発信していただいているということで、大変心強く思います。

続いて、東京メトロさんの様々な活動によって、社内外からの反応や社内の機運についてどのように感じているかお聞かせください。

**堂免：** 福島産直市は、これまで14回継続して実施し、会社にとっても恒例の行事となっており、社長をはじめ多くの社員が、目当ての商品を買いに足を運んでいます。昨年12月に開催された福島産直市では、山村社長が購入した赤かぶのお漬物などが大変おいしかったと感動されたほか、広報部内の女性社員の間では、長久保のお漬物（大根しそ巻き）が人気で、おいしいと口コミが広がっていました。

また、夏と冬に東京メトロの構内で福島県の名産品が購入できることを知っているお客様も増えています。お客様にとっても、社員にとっても恒例行事として定着したものになっていると思います。



【福島産直市】

**伊藤：** 今回、私も夏と冬の産直市を見せていただいたのですが、両方のイベントで山村社長に様々な県産品を購入いただき、ありがたく思っております。先ほどもお話ありましたが、なぜ「福島産直市」を開催しようとしたのか、その狙いをもう一度お聞かせください。

**堂免：** 継続的に東京から福島県情報を発信するために何ができるのかと考えた場合、わが社が持つ経営資源という「場」を結びつける中で、産直市が非常に有効であると考えました。ちょうど東京都の「ふくしま⇄東京キャンペーン」が始まったタイミングでもあり、産直市を企画しました。

当時は、ここまで継続することを予想していなかったと思いますが、復興支援というのは、“地道に”、“継続的に”ということが重要であると思います。年2回の開催ですが、持続的に支援できる行事になったのではないかと思います。

**伊藤：** 福島県が抱える課題として、風評があります。例えば、桃や米は震災前の価格に戻らない中で、今回、東京メトロさんの社食に福島県産米を使用していただくこととなりました。また、年度の途中で変更していただいたということで、大変なご苦勞があったと思いますが、その経緯や社員さんからの評判をお聞かせください。





【(上) 社員の食事の様子  
(下) 福島県産米を使用したカレー】

**堂免：** 現在、社員食堂で福島県産米を継続的に調達させていただいています。きっかけは福島県東京事務所様から福島県産米の社食での使用について相談を受け、社員食堂を管理しているグループ会社と協議した結果、「やりましょう。」ということになり、社員が食べられる機会を提供できるようになりました。社員も会社が提供する食事なので、安心し、自然に食べております。自然に食べているということは“おいしい”ということだと思っています。

**伊藤：** 評判も上々ということですね。お米を変更する際も業者が快く引き受けてくれた、また、他社とのネットワークがあるなど様々な話を聞かせていただきましたが、福島への支援について、他社との連携、協力体制で感じた部分をお聞かせください。

**堂免：** どの企業様も「福島県を応援したい」という気持ちは同じですので、協働するのは難しいことではありませんでした。思いは同じですが、特色の違う色々な企業様との連携は、単純な足し算ではないパワーや面白さが生まれますので、そういう面でも発見は多かったと思います。震災後当初はANAグループさんなどと連携していましたが、時が経てばまた新たなメンバーと新しい連携の可能性もあるかもしれません。

**伊藤：** お話しの中では、“継続”や“持続”というキーワードが出ています。東京メトロさんとして、これからも福島県に対してどのように関わっていくか、今後の展望をお聞かせください。

**堂免：** 福島産直市につきましては、年2回引き続き東京メトロをご利用するお客様にも喜んでいただける名産品を届ける機会を設けたいと思っております。また、TOKYO METRO NEWSでの情報発信につきましても同様です。先ほどの福島県産米につきましても、引き続き社員が楽しんでもらえるように提供していきたいと思っております。

**伊藤：** それでは、福島県へのメッセージ、県民へのメッセージをお願いします。



**堂免：** 福島県産品の風評被害など取り上げられていますが、東京からしっかりと福島県の復興の進捗状況をはじめ、農産物の安全性など正確な情報が伝わるよう、これからもできる限りしっかりとお手伝いをしていこうと思っております。

また、熊本地震の際は、熊本の産直市を開催しました。他にも三陸の鉄道会社やバス会社とスタンプラリーも実施しました。いろいろな地方の方々とお付き合いをしておりますが、その中で福島県とのお付き合

いは、非常に太く、持続的に取り組んでいると感じています。今までも、そしてこれからも、東京メトロの強みを十分に生かしながら、福島県を応援していきたいと思います。よろしくお願いいたします。

**伊藤：** ありがとうございます。福島を始め、地方に目を向けて支援していく、その中でも、福島県は太く、持続的にという言葉をいただき、心強く感じ、うれしく思います。今後ともよろしくお願いいたします。



#### 堂免 敬一さんプロフィール

1990年4月営団地下鉄（現 東京地下鉄(株)）入団。総務部、人事部などを経て、2005年4月関連事業部課長となる。2015年4月人事部研修センター所長に就任、翌年広報部長となり、現在に至る。